



日本植物病理学会ニュース 第12号

(2000年4月)

【今後の本学会の活動予定】

1. 平成12年度部会開催予定

- (1) 北海道部会：平成12年10月19～20日
北海道大学学術交流会館（札幌市）
- (2) 東北部会：平成12年9月28～29日
出羽庄内国際村（山形県鶴岡市）
- (3) 関東部会：平成12年10月6日
農林水産省農林水産技術会議筑波事務所（つくば市）
- (4) 関西部会：平成12年10月12～13日
石川県女性センター（金沢市）
- (5) 九州部会：平成12年9月20～21日
NTT 熊本会館（熊本市）

2. 談話会、研究会開催予定

(1) 平成12年度植物感染生理談話会

“A Dawn of Plant-Microbe Interactions”

日時：平成12年8月21～23日（月～水）

会場：高知県香美郡夜須町、「海辺の果樹園」

問合せ先：高知大学農学部植物病理工学研究室
曳地康史

TEL 088-864-5218, FAX 088-864-5219

E-mail: yhikichi@cc.kochi-u.ac.jp

参加申し込み等のお問い合わせは、なるべく E-mail にてお願いします。定員は150名を予定。

(2) 第20回土壌伝染病談話会

日時：平成12年10月24～26日（火～木）

会場：熊本県熊本市，熊本市国際交流会館

問合せ先：九州農業試験場地域基盤研究部 河本征臣
TEL 096-242-1150, FAX 096-249-1002
E-mail: komotoy@knaes.affrc.go.jp

【今後の関連学会情報】

1. 平成12年度日本菌学会大会（第44回大会）

日時：平成12年5月20～21日（土～日）

会場：奈良市，近畿大学農学部奈良キャンパス

問合せ先：近畿大学農学部食品微生物研究室

日本菌学会第44回大会事務局

TEL 0742-43-1551（内）3406

FAX 0742-43-2252

E-mail: terasita@nara.kindai.ac.jp

2. 平成12年度日本土壌微生物学会大会

日時：平成12年5月25～26日（木～金）

会場：秋田市，秋田県立大学生物資源科学部講堂

問合せ先：秋田県立大学生物資源科学部植物保護学講座

日本土壌微生物学会大会事務局

TEL 018-872-1639, FAX 018-872-1678

E-mail: furuya@akita-pu.ac.jp

【今後の関連国際会議情報】

1. **1st International Symposium on Induced Resistance to Plant Diseases:** Corfu Island, Greece, May 22-27, 2000.
2. **Canadian Phytopathological Society and Pacific Division of APS Annual Meeting:** Victoria, B.C., Canada, June 18-21, 2000.
3. **19th Annual American Society for Virology Meeting:** Colorado State University, Fort Collins, CO, USA, July 8-12, 2000.
4. **18th International Symposium on Virus and Virus-like Diseases of Temperate Fruit Crops:** University of Kent, Canterbury, England, July 9-15, 2000.
5. **Tenth International Conference on Plant**

Pathogenic Bacteria: Charlottetown, Prince Edward Island, Canada, July 23-27, 2000.

6. **7th International Symposium on the Microbiology of Aerial Plant Surfaces:** Berkeley, CA, USA, Contact: Steven Lindow, University of California, Dept. Plant and Microbial Biology, 111 Koshland Hall, Berkeley, CA, 94720 USA, August 3-8, 2000.

Phone: 510/642-4174, Fax: 510/642-4995

E-mail: icelab@socrates.Berkeley.edu

7. **Annual Meeting of the American Phytopathological Society:** New Orleans, LA, USA, August 12-16, 2000.

8. **Third International Symposium on *Rhizoctonia* (ISR 2000):** Taichung, Taiwan, August 17-22, 2000.

9. **1st Asian Conference on Plant Pathology:** Beijing, China, August 25-28, 2000.

10. **Fifth Congress of European Foundation for Plant Pathology:** Taormina and Giardini-Naxos, Italy, September 18-22, 2000.

E-mail: efpp2000@mbox.fagr.unict.it

11. **7th International Symposium on dsRNA viruses:** Aruba (the Carribean), December 2-7, 2000.

【本学会活動状況（平成11年6月～平成12年1月）】

1. 部会活動状況

(1) 部会開催状況

① 北海道部会

平成11年10月28～29日, 株式会社ムトウ札幌本社会議室 (札幌市)

② 東北部会

平成11年10月7～8日, 弘前大学学生会館 (青森市)

③ 関東部会

平成11年10月1日, 東京大学農学部 (東京都文京区)

④ 関西部会

平成11年10月15日, 八丁堀ジャンテ (広島市)

⑤ 九州部会

平成11年9月9～10日, 鹿児島県社会福祉センター (鹿児島市)

(2) 部会開催報告

① 北海道部会

平成11年度北海道部会は10月28日 (木) と29日 (金) の2

日間, 札幌市株式会社ムトウ札幌本社会議室で開催された。参加者は119名であった。29日は午後から第177回談話会を行い, 「植物病原の分類学の現状と将来」というテーマのもと, 3名の方に講演をお願いした。北海道大学大学院農学研究科教授上田一郎氏には「植物ウイルスの分類学の現状と将来」, 農業生物資源研究所青木孝之氏には「フザリウム属菌の分類学における最近の動向」, 北海道大学大学院農学研究科教授生越明氏には「*Rhizoctonia* 属菌の分類学の現状と将来」についてお話を伺った。それぞれの分野における世界的な動向, 分類はどうあるべきかという建設的な提案をいただき, 活発な議論がなされた。夕刻には懇親会が開かれ, なごやかな歓談が2時間続いて終了した。翌日29日には9時30分から一般講演が行われ, 27題の研究発表について熱心な質疑, 応答がなされた。また, 総会において, 庶務, 会計報告が承認された。(近藤則夫)

② 東北部会

平成11年度東北部会及び部会創立35周年記念シンポジウムが10月7日 (木), 8日 (金) の2日間にわたって, 青森県弘前大学学生会館で開催された。参加者はこれまでの最高の156名であった。シンポジウム第1部の特別講演 (江原淑夫氏, 古屋廣光氏, 石黒潔氏, 高橋壯氏, 桑田博隆氏, 鈴木一実氏, 富樫二郎氏) を皮切りに第2部招待講演 (岡山大農の白石友紀氏, 北農試の大澤勝次氏, 農研センターの若狭暁氏の3氏による) が行われ, 植物病理学と遺伝子工学の奥の深さと広がりに参加者一同深い感銘を受けた。シンポジウムに続いて一般講演37題 (ポスター発表10題を含む) が発表された。内訳はウイルス・ウイロイド16題, 細菌病2題, 糸状菌病19題で熱心な質疑応答が交わされた。7日夕刻からは123名が参加して恒例となっている懇親を深めながらの情報交換会が開催地のご尽力のもと盛大に行われた。8日の総会では部会創立35周年記念出版や会計の報告などが承認され, 部会長に松本勤氏を再選して, 次年度開催地を山形県鶴岡市に決定した。なお, 平成12年度の部会からは OHP またはポスターによって発表することにした。(松本 勤)

③ 関東部会

平成11年度関東部会は, 10月1日 (金) 午前9時半から東京大学農学部1号館で開催された。日比忠明部会長の挨拶の後, 41題 (ウイルス病関係7題, 細菌・ファイトプラズマ病関係10題, 菌類病関係23題) の研究成果が, 午前17題, 午後23題に分かれて発表された。230余名が出席して活発な討議が行われ, 午後5時半頃予定通りに終了した。

講演終了後、東京大学山上会館に於いて約70名の参加を得て懇親会がもたれ、梶原敏宏名誉会員の音頭による乾杯後、なごやかな歓談が続ぎ、最後に山田昌雄名誉会員の挨拶で終了した。なお、関東地区評議員会を昼休みに開催し、次年度の部会長として農林水産省農業研究センター病害虫防除部長の藤澤一郎氏を推薦することとした。この件は午後にかかれた総会において承認された。最後に、本年度の部会を無事終了できたのは会員の皆様のご協力の賜物であり、ここに深く感謝申し上げる。(日比忠明)

④ 関西部会

平成11年度関西部会は10月15日(金)午前9時から広島市の八丁堀シャングレにて開催された。一般講演では90題(感染生理30題, 菌類病39題, ウイルス病12題, 細菌5題, 防除薬剤4題)の研究成果が3会場にて発表され、活発な質疑応答が行われた。講演終了後、同会場にて恒例の懇親会が盛大に行われた。懇親会は部会開催地委員長半川義行氏の歓迎挨拶、井上忠男氏の音頭による乾杯後、2時間余りにわたり和やかな歓談が続いて終了した。役員会は部会前日の10月14日(木)に同会場にて開催された。庶務、会計などの報告が承認された後、部会会則に基づく選挙により平成12年度の部会長に久能均氏が選出されたとの報告があり、承認された。また、平成12年度の部会開催地として石川県女性センター(金沢市)を、同開催地委員長として古賀博則氏が選出され、さらに部会幹事として高松進氏が推薦された。これらの案件は15日午後の総会において提案され、承認された。(堀野修)

⑤ 九州部会

平成11年度九州部会は例年どおり九州農業研究と共催で9月9日(木)に鹿児島市の鹿児島県社会福祉センターで開催された。講演題数は26題、その内訳は細菌病6題、糸状菌病7題、ウイルス病12題、その他防除器材関連1題で、参加者(100名余)による熱心な討議が行なわれた。昼の休憩時間を利用して幹事会が開催され、役員の交替、会計報告、次年度開催計画等が審議され、これらの案件は引き続き行なわれた総会で承認された。また、学会終了後には、恒例の日本応用動物昆虫学会九州支部会との合同懇親会が盛大に行なわれた。翌10日(金)は、植物病理関係者による第24回シンポジウムが開催された。話題提供として、1) リンゴの接ぎ木伝染性果実異常症(果樹試験場カンキツ部伊藤伝氏)、2) サトイモの枯れ上がり症状の原因究明と防除(鹿児島農業試験場大隅支場鳥越博明氏)、3) カンキツグリーンング病(黄龍病) — とくに分布北限

地域の自然条件下における発病生態 — (南九州大学園芸学部宮川経邦氏)の3題の発表があり活発な論議が行なわれ、盛会であった。(河本征臣)

研究会開催報告

(1) 平成11年度植物感染生理談話会

平成11年度植物感染生理談話会は平成11年7月14日(水)~16日(金)の3日間にわたり、風光明媚な九重・阿蘇国立公園内、大分県湯布院町山下湖温泉に位置する湖畔の宿、九重レークサイドホテルで開催された。今回は、「病原性と抵抗性の分子基盤(Molecular Basis for Pathogenicity and Resistance)」を課題とし、まず初日午後、九州大学農学部育種学講座教授吉村淳博士による「イネゲノムのマッピング」の特別講演が行われた。一般講演では、細菌病関連3題、糸状菌病関連6題、ウイルス・ウィロイド関連3題の話題提供があった。最後に、神戸大学農学部眞山滋志氏に総合討論の座長をお願いし、活発な論議が行われた。また、初日は原則全員参加で夕食を兼ねた懇親会、2日目午後3時からテニス、釣り堀、温水プール、湖畔ならびに湯布院町散策等で楽しんでいただいた。地理的、時期的条件からか、参加者総数は70名であったが、夏の学校にふさわしい会場設定をしたつもりであり、参加者からは好評を博した。平成12年度の本談話会は、高知大学の奥野哲郎氏のお世話で開催される予定である。なお、本談話会の講演集(1部2,500円)をご希望の方は、九州大学農学部高浪洋一(Fax 092-642-2835, E-mail: takanami@agr.kyushu-u.ac.jp)まで御連絡下さい。

(高浪洋一)

(2) 第20回植物細菌病談話会

第20回植物細菌病談話会は平成11年9月21日(火)~22日(水)に山形県鶴岡市出羽庄内国際村ホールで80余名が参加して開催された。今回は特別のテーマを設定しないで発生生態、生物防除など各分野からの次のような話題提供をもとに、活発な討論がなされた。1) 東北地方における植物細菌病の発生概要、2) オウトウの枯損をひきおこす細菌の発生生態、3) ヒラタケ腐敗病の発生を抑制するキノコ由来細菌について、4) イネ白葉枯病菌のレース関連DNA領域、5) *Burkholderia glumae* のトキソフラビン産生遺伝子群の解析、6) 内生細菌を用いた作物病害防除、7) 土壌による水溶性アルミニウム流出の差異と特殊施肥法によるジャガイモそうか病の防除法、8) ハクサイ汁液に含まれる軟腐病細菌のバクテリオシン誘発物質、9) 植物病原細菌を利用したスズメノカタビラの防除、10) 細菌が生産する成分の多様性とその利用 — *P. tolaasii* の毒素と *J.*

lividum の色素を中心に、11) 植物病原細菌のゲノム解析の世界的動向。最後に全体にわたる要点と今後の課題、展望等を中心に総合討論が行われ成功裡に終了した。なお、講演要旨集には、この他に「最近報告された新しい細菌病(2)」が掲載されている。今回は2年後の平成13年に北海道で開催されることになった。(富樫二郎)

【学会関連各委員からの報告】

1. 日本学術会議報告

平成11年10月25～28日に開催された日本学術会議の総会において、政府に対し「我が国の大学等における研究環境改善について」の勧告を行うこと、及び日本学術会議の自己改革を進めるために「日本学術会議の自己改革について」と「日本学術会議の位置付けに関する見解」の声明を行うことについて審議を行った。第6部主催による生物資源とポスト石油化学についてのシンポジウムが平成12年2月16日に開催された。17期日本学術会議第6部の活動の一環として、この課題を元にした対外報告を作成し、今期末に公表する予定である。各学会協と日本学術会議との連携を深めるため、第6部会員と第6部に所属する各学協会会長との懇談会を5月頃に昨年同様の方式で開催する予定である。17期日本学術会議も今年の7月をもって終わり、新たに選出される会員による18期へと引き継がれるが、本学会はすでに日比忠明氏を次期会員候補者に決定している。(土崎常男)

2. 日本学術会議植物防疫研究連絡委員会報告

本研連の主催で、シンポジウム「植物保護関連の内分泌攪乱物質の実態」を平成11年11月12日に開催したが、151名が参加し活発な質疑応答が行われた。平成13年度より、科学研究費補助金(学術振興会に係わるもの)の年間スケジュールが変更となり、締め切りが10月上旬となる予定で、締め切りは従来より約2ヶ月早くなる。分科細目「植物保護」の1段審査委員は平成12年度より6名に増員されたが、13年度の1段審査委員の定数(6名)の学会への割り振りについて、12年2月16日に開催した研連委員会で協議した結果、委員の配分は分野別申請課題数を勘案して行うこと、及び各分野には最低1名の定数を配分することを原則とすることにし、その結果、植病2、応動昆2、農薬1、雑草1となった。なお、微生物研連から定数配分の要請があったが、定数は研連に配分するのではなく、分野別に配分するとの原則を微生物研連も了承されるよう申し入れた。分科細目「応用分子細胞生物学」の1段審査委員は、8研究連絡委員会に対し12名の割り当てがある

が、配分は8研連のローテーションで行われる。植物防疫研連では平成13～14年に2名(植病, 農薬), 15～16年に1名(応動昆), 17～18年2名(植病, 農薬), 19～20年1名(応動昆)といった配分で審査委員の推薦を行うことになった。(土崎常男)

【関連国際会議の概要紹介】

1. Silicon in Agriculture Conference

会議は1999年9月26～30日に米国のフロリダ州で開催された。ケイ酸の農業に果たす機能と役割を検討する目的で開かれ、今回が第1回であり、第2回は2002年に日本で開催される予定になっている。100人弱の規模で行われ、16ヶ国からの参加があった。発表数は口頭発表とポスターセッション合わせて60課題有り、うち病害虫関連は18課題で、多岐にわたる分野のなかでも多かった。多くの研究者がケイ酸を「IPM」の一つの手段として位置づけ研究を行っていた。また、イネ科作物以外の病害に対する効果も発表されていて、ケイ酸の適応範囲は広がりつつあるようだった。日本からは東北農試病害生態研究室長の石黒潔氏が、「Review of Research in Japan on the Roles of Silicon in Conferring Resistance against Blast Disease in Rice」のタイトルで報告した。日本には、古くから世界をリードするケイ酸に関する研究成果がありながら、あまり知られていないのが残念であった。会議の目的の一つに、研究者間の交流が挙げられていたためであろうか、ポスターセッションでは食事と飲み物が用意され、和気あいあいとした中で意見交換が行われた。(早坂 剛)

【会員の動静】

1. 学位取得者

魯 曉云 (Lu xiaoyun) H11.3

東京大学 課程博士(農学)

Taxonomic Study of Wheat Yellow Mosaic Virus (WYMV) and Wheat Spindle Streak Mosaic Virus (WSSMV) in the genus *Bymovirus*

【書評】

1. 渡邊恒雄: 研究余録『植物病理学と土壤菌』ライフリサーチプレス, 191頁, 2000年1月(1,600円)

本書には植物病理学と菌学に興味を抱き、その分野の研究に情熱を燃やし、楽しく励んできた一研究者の40年近い研究生活が生き生きと浮き彫りにされている。内容は著者の自分史であるが研究の醍醐味を十分に伝えており、若い研究者の研究心を刺激してくれる内容で、とくに土壤病害

と土壌菌の研究者には興味深く、有益な示唆を与えるであろう読物になっている。著者のアメリカ留学から帰国後の農水省研究機関での勤務までを通じて関わった土壌病害研究の世界と著者の研究成果が記述されており、一読することで土壌菌研究の世界を垣間見ることができる。内容は土壌菌の種類、菌の同定と記載、生理、生態、研究の現状と問題点、研究現場の様子、研究に必要な心構えなど多岐にわたっており、また、論文作成、論文審査、受賞などの研究活動や研究成果を通じて、具体的に研究生活の様子や苦勞、論文作成時の心がけ、問題点、成果の発表や印刷されることでの喜び、失敗、さらに在外研究での生活と研究施設の紹介、土壌病害に関連した諸問題の見聞録、台湾、パラグアイ、ドミニカでの病害調査の印象と現地の様子、海外での日々の生活、学問的にもまた仲間のつながりでも有益でまた楽しい国際会議での様子などが簡潔に記述されている。そして、著者の研究活動の様子だけでなく、随所に著者の考えが折り込まれており興味もてる。しかし、門外漢には見当がつかない菌の種名が説明もなく次々出てくるところなどは、菌に興味があって、ある程度の知識を持った読者でない面白さが半減するであろう。

本書は本のタイトルから連想されるような堅い本ではない、土壌菌に長年かかわってきた一植物病理研究者の豊かな研究活動の軌跡が読み物風にかかれた自分史である。内容が想起されるようタイトルにもう工夫が欲しかった。

(栃原比呂志)

【海外留学印象記】

Confederatio Helvetica

1999年9月から12月まで4ヶ月間、経済協力開発機構(OECD)共同研究プログラムの派遣研究員として、スイス連邦工科大学(ETH)植物科学研究所のUeli Merz博士のもとで研究を行う機会を得ました。同プログラムは「持続的な農業システムのための生物資源管理」をメインテーマとし、さらに4つの研究テーマが設定され、参加国の研究員を最長26週間まで、国外の研究機関に派遣し共同研究を行わせるもので、私はその中のテーマ1「植物/土壌システムにおける微生物の利用」に、「ジャガイモ粉状そうか病菌の地域間差異と拮抗微生物を利用した防除」という課題で応募し採用されました。以下、わずか4ヶ月でしたが、日本とは異なる文化に接した時間を振り返ってみます。

私が滞在したETHはスイス第一の都市チューリヒの中心部の高台にあり、テラスから市街が一望できる絶好のロケーションにあります。そこからは市街地の歴史ある多く

の寺院の尖塔やゆったりと流れるリマト川、チューリヒ湖や美しい山々を見ることができます。街中を縦横に走るトラムのETH駅正面にある植物科学研究所にはPlant Genetics, Plant Biochemistry等の研究分野があります。Plant Pathology groupはそのうちの一つで、統括するMcDonald教授を中心にPopulation biology, Biocontrol, Annual crop, Perennial cropの各グループに分かれています。それぞれのグループは教授や博士研究員を中心に、ポスドク、大学院生で構成され、そのグループの研究対象について様々な角度から、集中的に研究を行っていました。Group内での実験器具、試薬類、機器類等は専門の技官やスタッフによって一元的に管理され、無駄なく、合理的に運営されていました。Merz博士はAnnual cropグループに属していますが、実際の研究勢力は彼自身とパートタイムの研究員の二人で、私は彼らとともに粉状そうか病菌の感染機構、検出ならびに生物防除について研究を行いました。

彼らの一日は8時半頃始まり、朝9時半からのコーヒータイムでは、スタッフや学生が当番制でコーヒーを用意します。グループでは出身国・地域によってコーヒーの好みも違うため、濃さの違う3タイプが用意されます。アメリカ出身の教授はいつも“Schwach(うすめ)”, イタリア語圏からの学生は“Stark(ストロング)”を選びます。私は日本人らしくいつも“Mittel(中ぐらい)”でした。スイスは4つの公用語(独, 仏, 伊, ロマンシュ)を持っており、チューリヒはドイツ語圏にあります。彼らは普段はドイツ語、それもスイスジャーマンで話すので、大学で適当にドイツ語を学び、留学が決まってからラジオドイツ語講座を大慌てで聞き始めたような私のような人間は、彼らが時に各自のベツト自慢を、そして時に研究体制、政治情勢を熱く語っているのを全く理解できませんでした。私は大学での普段のコミュニケーションは英語でとっていましたが、日常生活ではドイツ語は避けて通れないので、学内で留学生向けに無料で開かれているドイツ語講座を、私も多くの留学生に混じって2ヶ月間受講しました。地元の床屋に行って、習いたての片言のドイツ語で髪を切ってもらったのは良い思い出です。しかしながら、スタッフや学生は独, 仏, 英は当然として、普通に3~4カ国語を話すのは感心しました(欧州各国では当然なのかもしれませんが)。

私は民間の学生寮に住み、食事は主に大学の学食(Mensa)で摂っていました。Mensaではいくつかの定食(Menu)が提供されていましたが、毎日どれかのMenuには必ずフレンチフライ、レジュティエー、ジュペツリとい

ったジャガイモ料理が、日本のご飯と同じようにメインで盛られていました。また、仕事柄、買い物に出たスーパーではジャガイモ売場をよく見たりしていましたが、売られているジャガイモは品種ごとに袋詰めされて、常に4, 5品種が並べられ、その袋にはこの品種はどの料理に適している、といった情報が印刷されていました。ジャガイモ、といえば男爵薯がメークインしか知らず、時にはジャガイモ、としか書いて売っていない日本のスーパーとは違い、ここではジャガイモは確かに食文化の一端なのだ、と認識されました。

スイスといえばハイジの舞台となったアルプスの雄大な自然が思い浮かびますが、週末を利用してその一端に触れることもできました。国土自体が比較的小さく(九州と同じくらい)、鉄道網が発達しているのです。チューリヒからアルプス地方にも容易にアクセスができます。アイガー、ユングフラウやマッターホルンの雄々しくも、周りの牧歌的な風景に不思議に溶け込んだ美しさには息を呑みました。そしてその自然をいたずらに保護するのではなく、それらを資産として利用しつつ保護すべき部分についてはそうしていくという、明確な姿勢を感じました。チューリヒで過ごした4ヶ月は、スイスという国、そこにすむ人々をよく知るためにも、もちろん研究をするという意味においてもあまりに短いものでしたが、その日々は私に多くの刺激と新鮮な感動、出会いを与えてくれました。ここで得られたものをこれからの研究生活に生かして行かねば、と今は考えています。最後に留学に際してご迷惑をお掛けし、またお世話になったETHならびに農研センターの方々から心からの謝意を表したいと思います。

追記：冒頭の *Confederatio Helvetica* とは現在のスイス連邦の原型となった中世のヘルベティア国家連合のことで、現在も貨幣にその名が刻まれています。Internet でスイスを表す ch はこの略です。(中山尊登)

【学会事務局コーナー】

1. 学会費自動振込制度利用のお願い

日本植物病理学会では、学会費の銀行口座からの自動振込による納入が可能です。自動振込は、学会の事務効率化および会員各位にも便利かつ振込手数料がかからない(学会負担)等、双方に利便が期待されます。また自動振込制度をご利用いただいていない会員各位には、本年7月頃に申し込み案内と預金口座振替依頼書を送付させていただきます。

ます。平成13年度学会費の自動振込に間に合うための申し込み締め切りが9月30日となっておりますので、ご希望の方は、お早めにご記入・ご捺印の上学会事務局あて郵送願います。

2. 平成12年度の学会幹事および事務局

平成12年度の幹事は、難波成任庶務幹事長、中島雅己・植草秀敏・堀田光生庶務幹事、月星隆雄会計幹事の5氏となりました。

事務局では、飯田典子、早坂美知恵の2氏が日本農薬学会、日本応用動物昆虫学会および日本植物病理学会の3学会を担当しております。

平成10~11年度の幹事を担当された、本田要八郎、中野正明、渡邊 健の3氏には大変ご苦勞様でした。

【学会ニュース編集委員会コーナー】

情報提供および投稿のお願い：

本ニュースは「少しでも会員間の風通しを良くしようとの願い」から、身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されてきております。平成12年度から学会ニュースの発行が和文誌会報に年3回となります。一部の情報については掲載が間に合わない場合もありますが、会員各位には有用な多くの情報をご提供いただき、可能な限り掲載する予定です。また、会員の各種出版物につきましては、著者あるいは編著、本のタイトル、出版社、価格および簡単な内容(例えば目次の一部)を下記「学会ニュース編集委員会」宛お送りください。なお、書評の投稿方法等につきましては、学会ニュース6号(会報63-4, 1997)編集後記をご参照下さい。このほか、会員の動静、学会運営などに対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いいたします。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

日本植物病理学会事務局

学会ニュース編集委員会

FAX 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明、塩見敏樹、難波成任、中島雅己、植草秀敏
各委員宛

編集後記

昨夏に学会ニュース編集委員長の細川大二郎先生が急逝されたことから、本田要八郎、渡邊 健および中島雅己氏の3委員の協力を得て編集してきました。学会ニュース編集の趣旨を踏まえて親しみやすいニュースにしようと編集に誠心誠意打ち込んでおられた細川先生の急逝の報を受けた時には、どうなることやらと途方に暮れましたが、委員諸氏の奔走によりなんとか持ちこたえることができました。この間、迅速さを求めたが故に誤報をお伝えして慌てて訂正のお詫びを記したり、逆に時期を逸したこともありましたが、ご容赦下さい。次号からは新編集委員に交代しますが、これからも親しみやすい欄とするために気軽にご意見や身近な情報をお寄せ下さいますようお願いいたします。

なお、故細川大二郎委員長の意を汲んで、懸命に取りまとめに奔走下さった本田、渡邊および中島委員には大変ご苦勞さまでした。 (植松 勉)

会員のご逝去

永年会員の福永一夫氏は平成12年2月10日に逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。